

「女性論」の考古学

近時の考古学の著しい進展は、多くの分野に対して詳細な「語り」を整え、次第に体系化を促す方向に進みつつある。「女性論」、とくに古代における女性の在り方をめぐっても多くの資料が蓄積されており、視座の展開と相俟って種々の見解が叢出している。本稿では、こうした所見を踏まえつつ、私見を中心に据え私なりの構造観をもって「女性論」の考古学を語ることとしたい。

一、縄文時代の「女性観」

悠久の時間の彼方、記すものをもたない縄文時代、こうした時代の志向や思惟、論理や観想の復原は考古学に付託されるどころ極めて大きい分野である。女性観をめぐって資料を検討しつつその復原をまっず行なうこととしよう。

縄文時代の人々の住宅は、地面を径五〜六m、深さ数十cm掘り下げた内に炉を設け柱を樹て屋根を葺きおろす竪穴住居である。地面より一段低く床を作るだけに出入口が明確に定められ、住居の正面観と軸が定まる。出入口を入った空間が作業空間であり、中心やや奥寄りに炉が作られ、奥は神を祀る空間となっている。住居の軸線上のこうした空間配置によって生じた左右の空間は居住空間と見るべきものであ

* 水野正好

り、生活資料が集中する。竪穴住居内のこうした機能空間の構造的な配置を検討すると、生活資料の在り方から見て、石斧や石鏃など男子材と考えられる資料が左側居住空間に、土器や石皿・磨石といった女子材と考えられる資料が右側空間に集中するといった二分現象が屢々見られる。勿論、女・男子材の左右逆用の例も存在するが、いずれにせよ、一住居内が中軸の作業・炉・神座空間を軸として、左・右に二分され、性別に用益されていることが確かめられるのである。女の居住空間、男の居住空間、そうした二つの対応する空間が竪穴住居を貫徹して息づいているのである。まず、ここに「女」・「男」の在り方を問う一面が浮かび上がったのである。

縄文時代の集落を発掘すると、こうした竪穴住居が数多く発見されるが、二棟の竪穴住居が常に緊密に手を取り合い、五代、六代と長期にわたり存続していくこと、また、こうした二棟の組み合わせが三単位集まって集落を構成していることが知られている。勿論、一棟や三棟を単位とする例もあり、四単位といった例もあるが、典型としては二棟三単位という型をもって集落が形成されているのである。こうした単位となる二棟の組み合わせは、一棟に戸主・妻・子女、一棟に戸主の父母と兄弟姉妹を想定する型が最も相応しい。こうした想定に立脚す

るかぎり、一家族が構成する二棟の居住者は居住空間の面積や構造から見て五人前後、計一〇人前後となり、他より入り来った家族員は戸主の「妻」と「母」の二人と見なされるのである。戸主の兄弟姉妹といった父母と共にある家族員はいずれも他集落に配偶者をもつ夫婦別居制をとりその子も妻方に居住するものと考えてよいであろう。従って、戸主の妻は常に戸主の「母」と戸主の「姉妹」と共にあって家族を維持する形をとることになるのである。姉妹の子と我子の混り合う家族でもあり複雑な人間関係が存在したことは十分に予想されるところである。

こうした戸主の妻を中心に展開する祭祀に「土偶祭祀」がある。竪穴住居が女性空間、男性空間という型に居住空間を二分し、左右を別けて住み分けを果しているように、宗教儀礼―祭祀もまた女性の祭祀と男性の祭祀に弁別されているのである。男性祭祀の「石棒祭祀」に対応する形で「土偶祭祀」が実修されているのである。石棒祭祀は、男茎形に作られた石棒をめぐる祭祀であり、人間、動物世界を通じて「男茎」でもって象徴的にその世界の甦りを演ずる。巨大な白色の男茎―石棒を地面に突き樹て、犠牲の血を灌ぎ肉を懸けといった祭の日が続き、血は凝固して石棒に粘り、肉は乾いて石棒に纏い、白―赤―黒―赤―黒と饒わしく彩りを変え、祭の頂点、この石棒の四周に火をたき、その熾えたぎる中で石棒に粘る血、纏わりつく肉が昇華し、石棒は祭奠果てる中で白色に還るのである。血肉による力の付与と、火による浄化の中で男茎―男性世界が甦るのである。土偶も同様である。女神を象る土偶は作られた時は全て完全であるが、発掘調査で見出される土偶は殆んどが損じている。手足、顔や身をもぎ損じて「死」を表現する祭祀が考えられるのである。女神の殺害―死を演ずる祭祀であり、土偶に妊る様の形像が多いだけに身籠る母の死を通じて若子

の誕生が期されていると見てよいであろう。竪穴住居の左居住空間―男性空間に屢々横に臥かされた石棒が見られ、右居住空間―女性空間に土偶が埋められていたり配置されている例が多いが、こうした現象は男・女間に対する祭祀が息づいていたことを語るものである。

土偶・石棒は、女性原理・男性原理が貫く祭祀であり、女性世界、男性世界の衰弱を甦らせる重要な祭祀であった。女性が植物栽培や果実の採集といった世界に係り、男性が動物捕獲やその解体といった動物世界に係るだけに、生計、生業に係る性別分業と重なり合い見事な対構造をとっていると言ってよいのである。このように見てくるかぎり、竪穴住居内の居住空間と言い、生業に係る性別分業と言い、あるいは関連しての土偶・石棒祭祀といい、共に等しく対比される型、二分構造、対構造を示していると説きうるのであるが、こうした対構造を超える世界が一面で見られるのである。それは「家の神」の在り方に暗示されている。竪穴住居の正面最奥部に神座が見られる。壇を作ったり配石した中に自然石の石柱が樹つ。頭太く根窄りの石柱であり、壇の一边に食酒を饌じた甕や鉢が連る。この自然石柱は、石棒と同様、樹てて用いるものであり、時に樵火したものもあり、石棒同様灌血懸肉の対象となるものである。石棒に供進の痕跡を見ることは極めて稀であるが石柱は常に樹ち供進を常に享けているのである。それだけに「家の神」「家祖の神」と見てよいであろう。この石柱が樹物であり頭太脚窄の姿を強調する上、灌血懸肉といった石棒と共通する性格を見せることからすれば、この石柱を奉斎する者が男性であり、男性世界に「家の神・家祖の神」が属していることを窺いうるのである。家神・家祖神をまつる例が男性、戸主にあることを説いたが、さらに重要な事実が見られる。縄文時代の集落が二棟からなる三単位で成立する例が多いことは先述したが、こうした三単位が、中央に広い円

形広場空間を設定し、その外周を三分して各家族が占地する形を撰んでいるのである。従って馬蹄形の集落を形成し、その外周に貝塚・残滓廃棄空間がめぐるのである。集落の草創時、まず広場空間が誕生する。この空間こそ集落の基点となるべき空間であり、最も聖なる空間であると言えよう。この円形広場の中心―聖心に時に規矩雄大な自然石柱が樹つのである。石柱はやはり頭太脚窄の姿をとり、根元を石囲いする例もある。罹火の例もあって、竪穴住居内の神座―石柱と同様、灌血懸肉、供儀供進といった行為の中で祭祀されるものであることを物語っている。集落の根源たる円形広場、その聖心にたつ石柱は、その位置からみて集落の根源にある神格、最も聖なる存在と言いうるのである。こうした聖心に樹つ神格が「集落の祖神」であり、神統譜の重要な一画を構成するものであることは言うまでもないところである。祭式の内容、その形状などから推察してその祭式を実修する者が男性であると説くことも容易であろう。このように見てくると、「家の神・家の祖神」「村の神・村の祖神」の奉斎という極めて重要な祭式の執行は男性の修するところとなつていると言えるのである。縄文時代の宗教構造、祭祀空間から見るかぎり、家祖、村祖といった性や生業を超えた神格、規範の根源たる神格の所掌は男性世界にあり、それが集落や家族の姿を反映するものであるだけに、社会構造としても家長は男性、集落を統べる者も選ばれて男性がこれに当るとするのが妥当であろう。

ところで、最近各地の調査で「土偶」をめぐる世界が次第に彩り豊かになり始めた。岩手県大迫町立石遺跡では二九八点という多量の土偶が狭い範囲から集中して発見された。全ての土偶が損壊しており接合し得ないと言つて土偶の五体を損じ、その一片一片を村の中の凹地に次々と配り、やがて最後の一片がこの聖なる地―死した土偶を葬り

甦りを願う場に持ちこまれるのであろうが、こうした土偶の中に規矩の大小が極めて顕著に見られるのである。同町の宮沢遺跡では一層卓抜した規矩をもつ大土偶が単独で発見されており、土偶をめぐる神統譜の中に大土偶―中土偶―小土偶といった構造が息づいていた可能性を暗示している。こうした構造が男性世界の「樹物」の構造―立石（村祖）・石柱（家祖）・石棒（性別生業神）と対になる女性世界の「土偶」の構造―大土偶（村祖）・中土偶（家祖）・小土偶（性別生業神）と見るべきであるか、或いは男性世界の性別生業に係り合う石棒と対になる女性世界の性別生業に係る土偶として把え、大・中・小土偶の在り方を土偶祭式の整備に基くものと見るべきであるかは必ずや将来論議を呼ぶところとなるであろう。ただ前者の所説が受け容れられた場合でも広場の聖心に樹つ立石、住居最奥の聖座に樹つ石柱といった「場」と「供献・供進」を享ける祭式の姿は「土偶」世界には見られぬところであり、集落を統べ家を司る神は立石・石柱に表徴される男性世界にあつたと見るべきであろう。

女性世界と男性世界を対比する時、性差による双分原理が重要な機能を果していることに気付くのである。植物―籠りに力を得ての甦り、動物―血肉に力を得ての甦り、そうした背景が土偶と石棒の根底に流れ、対構造を形づくっているのである。こうした形は宗教面のみに見られるだけでなく、各種分野に深く見られたようである。縄文時代前期に女性の装身具として成立した玦状耳飾・貝製腕飾は男性には見られず、「耳・腕飾る女性」「耳・腕飾らぬ男性」として興味深い対構造を提示している。縄文時代晩期となつても「耳・腕飾ること多き女性」と「耳・腕飾ること少なき男性」といった傾向が色濃く漂っているのであり、対構造の貫徹が窺えるのである。一方、「腰飾」着装例は男性に圧倒的に多く、又杖角器の形をとるのに対し、数多い女性例

は鉤状突起をもたぬ管状品に限定されると言う。「腰飾ること多き男性」「腰飾ること少き女性」といった対構造が働き、その上、形に性別の相違が見られるのである。「耳・腕」に意識の赴く女性、「腰」に意識の赴く男性といった性別に二分される意識構造もまた注目すべき事象であろう。

こうした性差にもとづく相違とは異なる分野に社会的地位に基づくかと思われる差異が男女両世界ともに見られる。例えば、成人に至る段階で「抜歯」といった通過儀礼を必要とする縄文時代は、被抜歯率は極めて高いものがある。男・女とも抜歯の痛苦を経たはじめて成人と見做され、神話や祭儀を知り狩獵、農耕に加わり得たのである。こうした抜歯を検討して春成秀爾氏は東海・中国地方の縄文晩期の基本となる抜歯型式として、上顎左右犬歯 (canine tooth) だけを抜去し下顎歯を抜去しないO型、上顎両犬歯の抜去に加えて、下顎中・側切歯 (Incisor = $I_1 \cdot I_2$)、四本を抜去する4I型、さらにそれに加えて下顎両犬歯をも抜去する4I2C型、下顎両犬歯を抜去する2C型、それに加えて下顎中・側切歯一―三本を抜去する2C2型の五型式をあげた。こうした五つの抜歯型式中、又状研歯と係り合う抜歯型式は四一型系列に多く、2C型系列には少いことを指摘している。又状研歯は抜歯時残した歯にフォーク状に刻み目をつける特異な歯牙加工であるが、こうした人目を惹く又状研歯の持ち主が四一型系列の抜歯者に偏り、しかも、それらの又状研歯の持ち主が、男性の場合は腰飾りを装着、女性の場合は耳飾・腕飾りを装着するのである。言い換えれば、装身具で身を飾る男女は特に他と区別された社会的地位にあるものであり、四一型系列の抜歯を施し、さらに残る歯に又状研歯を施すといった動きをもつのである。この事実は縄文社会の内が均質ではなく、宗教的にも社会的にも、また緩やかな意味での政治上でも他と区別され

卓越した地位に置かれる男・女が識別されて存在したことを物語っているのである。女性・男性両世界に通じて抜歯があり、通じて又状研歯が見られる事実は、卓越した女性・男性が共に同じシンボルでもって他を区別されたことを意味しており、性ごとに対構造を貫徹している情景が復原されるのである。

こうした性別的対構造と社会的地位にもとづく差異を検討した場合、おぼろげながらも縄文時代の「女性観」が浮かび上ってくるのである。集落の祖神をめぐる広場聖心の立石祭式や、住居の家祖をめぐる神座とその石柱祭式は確かに男性の所掌する所であった。供儀・供進の品も男性世界に息づくものであり、神の象徴たる立石・石柱も共に男茎をイメージさせるものであった。従って村祖や家祖の意を問い、意にそつての動きを決定するものとして卓越した男性の存在があったことは十分に推測できるところである。集落を統率するこうした男性は例えば又状研歯を施し腰飾を装う姿をとると考えられるが、似た女性姿―又状研歯を施し耳・腕を飾る者が一方に見られるのである。女性を統率するだけでなく、男性統率者と対となり、共に村を仕切り、家を司るのである。従ってこうした男・女の場合は常に対構造をとる二者合せて集落・家があり得たものと考えられるのである。一般の集落員の関心は、男・女に明確に二分され、装身の様などに顕著な性差が認められた。生業・信仰においても、すでに起居の空間にあつても男・女の性差が顕然として辿り得るのである。男・女両世男を弁別する中で両性は共存しえたのであり、共に等しきもの、相対するものとして息づいたのである。袂状耳飾着装女性骨を多く検出した大阪府国府遺跡では、袂状耳飾着装女性が二体ずつ接して葬られる傾向を見せているが、こうした墓域の在り方からすれば、一家族の姉妹なり、一家族の母と娘といった形が想定され、「家」に袂状耳飾着装の流れ

があったこととなるのである。袂状耳飾が卓越した「家」の女性に与えられたものと見做すならば、「家」をめぐる女性の地位の相伝といった事実もまた検討されねばならないのである。

二、弥生時代の「女性観」

縄文時代、女性・男性の性差は極めて顕然たるものがあつた。生業にあつては植物と動物、祭式にあつては土偶祭式と石棒祭式、座席にあつては左と右、全ての面でこうした二分する論理と対構造が息づいているのである。しかし、重要なことは、こうした対構造が政治的な対構造の型をとらぬことである。縄文時代を通じてこうした在り方が貫徹しているのである。

かような在り方を一変させる時代が来る。弥生時代のはじまり、弥生社会の成立がそれである。長い期間、極東の孤島として大陸との交渉をもたず、内なる力で創造を重ね、それなりに爛熟した文化を築き上げた縄文社会を一瞬に衝き崩す「新しい思惟」体系が中国、韓国を経てこの孤島に齎らされるのである。この「新しい思惟」体系の担い手は漢・韓人であり、彼地の思惟を「人」が伝えたのである。漢・韓人の移動はかなりの人数であり、その流れは二極を形づくった。一は北九州であり、一は畿内であつた。移動の究極地は畿内であり移動の中枢は畿内に定住したものと見てよく、途時の重要な拠点として北九州に一班を置く形を撰つたのである。この情景が間もなく、倭国中枢と大率といった国家機構を誕生させることとなるのである。「政治」や「王統」といった想いの強い文化が弥生文化であり、そうした彩りに包まれた時代が弥生時代である。

この弥生時代の「女性観」をめぐる資料に墓地がある。著名な山口県土井ヶ浜遺跡は弥生時代の前期から中期に及ぶ墓地であるが、数多

くの人骨の発見が見られる。興味ぶかいことに、この墓地の人骨の配置を見ると、全体が頭を東にして葬られているのであるが、詳細に検討すると、頭の方向の僅かな相違から幾つかのグループが弁別されることに気付くのである。煙草乾燥小屋を中心として見た場合、西の一群、北の一群、東の五群がそれである。こうした各群を具体的に検討するとそこに「夫婦」が想定される二体の男女の並葬例が指摘されるのである。北の一群では三〇八・三〇九号人骨、四〇九・四一〇号人骨、三一一・四〇八号人骨がそれであり、東方五群中にも二三五・二三六号人骨、二二五・一二七号人骨などのお幾例かの並葬例が見られるのである。こうした並葬例の中には四〇九・四一〇号例のように小児男性を成人女性四一〇号胸上に配葬した例、二二五・一二七号人骨例のように小児女性を成人女性一二七号人骨脚脇に配葬した例、或いは二三五・二三六号人骨例のように小児男性を成人女性二三五号人骨の脇に配葬した例などがあり、こうした男女並葬例は「夫婦」であり、小児は夫婦間の子と考えられるのである。勿論、夫婦中の先葬者の埋葬位置を正しく確認することなく並葬した事例と考えられる例も多く、先に葬られた「父」の足許なり脇、或いは頭上に小児を埋葬した例や、先に葬られた「母」の足許や脇、或いは頭上に小児を埋葬した例も見られる。従つて土井ヶ浜遺跡の墓地は、夫婦とその間に誕生した小児の有機的な縁による埋葬が普遍化していることを知りうるものである。ところが、各グループを見ると必ずしもこうした「夫婦と小児」ばかりでなりたつのではなく、例えば北群では北に四一四・四二〇号人骨（全て男性成人骨）が偏在して見られ、東第一群の北に設けられた組合式石棺中には一三六・一四〇号人骨（全て男性成人骨）が収められているように男性成人の偏在した葬地も確められるのである。

土井ヶ浜遺跡の墓地は、こうした「夫婦—小児を含む」墓と成人男性墓の二種の組合せかり成りたっているのである。前者が各群の中心を占め、後者が脇に偏在する形で「群」を形成しているものであり、それだけに夫婦並葬が中心意識にあり、男性別葬（列葬）が脇意識として働いているのである。ほぼ「群」の全容が理解できる三群を取り上げ、「群」の性格を検討しよう。東第五群は八×五mという狭い長方形の墓域をもち、内に一〇四・一〇九号夫妻と二人の小児、一三二・一三三号夫妻、二〇・一九号夫妻、石棺内に葬られた一〇一号夫と小児、一〇二号人骨という四組の夫婦墓で構成されている。東二群は八×六mの墓域をもち、南側に二五〇・二四三号夫妻と小児、二二六・二二五号夫妻と小児、北側に二二五・一二七号夫妻と小児、一二五・ \times 号夫妻と小児、二四七号・ \times 号夫妻の五組の夫婦墓で構成されている。本群に北接する組合式石棺中から五体の成人男性骨の発見があり、夫婦五組と区別される存在としての成人男性の姿が迎れるのである。同様な事例が北群である。四一三・三〇八号夫妻と小女、 \times ・三一〇号夫妻、四〇八・三一一号夫妻・四〇九・四一〇号夫妻と小児といつた四組以上の夫妻墓と、これらから区別される存在としての北域の四一四・四二〇号成人男性の姿が迎れるのである。

このように見てくると土井ヶ浜遺跡の墓地が、墓地をいくつかの墓域に分け、家族に用益させている様が見え、併せて四×五夫妻を並葬し、時に小児を共葬する型を基本とする事実が浮かび上るのである。こうした四×五夫妻が同時に生存した夫妻ではなく時間の継起に従って葬られていく世代別の夫妻であった可能性が高い。弥生時代前期から中期に至る時間の四×五世代の夫妻墓であると考えられるのである。こうした墓地に示される「夫妻」の絆の強さは注目すべき事実である。戸主とその妻といった在り方は縄文時代にも見られるところ

であるが、墓地に明確に反映するのは弥生時代とともに始まるのである。死後における夫妻共生の想いを反映する重要な現象といえるであろう。

ところで、ここに注目すべき現象が指摘されるのである。夫・妻とは別にある夫の兄弟、姉妹の葬、或いは夫妻間の成人男女性の葬が如何なる形をとるのが問われることになるのである。仮りに先に夫妻としたものの中で対偶者の埋葬のなかつた事例を検討すると、東五群では石棺内に小児を伴って葬られている一〇一号成人男性、東二群の一二五・二四七号成人男性、北群の二一〇号成人女性が指摘されるが、一二五号成人男性は南接して小児を埋葬した石組があり成人の被葬者が想定され、二四七号成人男性も北脇の追葬者を配慮して南寄りへ葬られており、三一〇号成人女性、一〇一号成人男性のみが夫なり妻を明証しえない例となるのである。このように考えると、東二群・北群に見られる偏在する成人男性群の存在が重要な意味をもつことになるであろう。東二群の組合式石棺の五体は一体が壮年、一体が熟年、三体が老年に属する男性とされており、北群も七体全てが成人男性の単独埋葬である。こうした成人男性が戸主の兄弟であり、時には戸主の子息であった可能性がたよいのである。では戸主（夫）の姉妹については如何であろうか。北群では組合式石棺に葬られた成人女性が墓域東北隅に単独埋葬され、東五群でも墓域の東北隅に外接して装身具を着用した成人女性の単独埋葬が見られる。戸主姉妹中の極めて卓越した女性の葬であることは組合式石棺、装身具からも読みとれるところである。

以上の分析から種々の視点が拓けてくるであろう。まず第一に指摘される重要な事実は「戸主夫妻」の優越とそうした関係の長年の維持にある。墓域は本来戸主数代の用益を期して設けられていると言える

のである。第一に指摘される事実は小児はその死に当って「戸主夫妻」の側近に葬られるのを常とし、常に追葬者として位置づけられる。特に小児男子の追葬が多く女子追葬例は極めて少い。性差に基づくところが大であるとも言えよう。第三に指摘される事実は戸主と戸主の兄弟間には極めて大きい格差―社会的区別があり、兄弟は常に墓域脇、外に、妻子を伴うことなく単人で葬られるといった一面をもつ。第四に指摘される事実は、戸主の姉妹は殆んどこの墓域に埋葬されていないという事実である。特殊な権能をもった姉妹のみが、時に組合式石棺などに葬られるのが、その葬地は墓域脇、外であり、戸主兄弟の葬られる空間に等しい。いずれにせよ、戸主兄弟以上に戸主姉妹が低く位置づけられていたと言いうるのである。

土井ヶ浜遺跡の墓地を通じて、中国・韓国を経て我国に至った新しい文化―弥生時代の家族の実態を瞥見したが、それは縄文時代の家族とは大きく異なるものであった。男女は対構造の根源であり、それだけに常に対置される発想の中に息づいていたし、その間に「共にある者」としてその存在価値を相互に強く認識し合い二者平等に近い関係にあった社会が、対構造を政治的構造に組み入れ、上下の関係、支配被支配の関係に絡み合せた型の社会へと変化するのである。こうした発想は中国では既に確立していた論理であり、社会構造であったし、弥生社会は母胎たる彼地のこうした政治的な構図を生まれながらに胚胎する形で弥生社会が成立し展開していくのである。土井ヶ浜遺跡の墓地に見られた「戸主・妻」―「戸主の兄弟・戸主の姉妹中の卓越した女性」―「戸主の姉妹」といった明確な埋葬に見る差は、家族の中に「一つの政治論理」が貫徹している事実を如実に伝えていっている。女性世界が「戸主」を基準に両分され「妻」たる世界が生み出されているのであり、戸主の妻たり得なかった姉妹は家族中の最も低い位置

に置かれ、通い来る男性との間に生れる子供ともども、常に戸主に従属するに近い状況にあったのではないかと考えられるのである。

山口県土井ヶ浜遺跡でのこうした所見を下敷して、畿内中枢部に見られる墓制を見ることにしよう。中国・韓国を経て一部を北九州に留め大挙して到り着いた人々の畿内の上陸地は河内の地であり、居した地は奈良―大和―であった。この河内の地は当時、内湾の良港であり、倭国の表玄関、主港津として息づき、多くの漢・韓人を配し、機構を整備してその維持に努める地であった。こうした河内の地に成立して来る墓制が「方形周溝墓」と呼ばれる墓制である。著名な東大阪市・瓜生堂遺跡第二号方形周溝墓、第一四号方形周溝墓を取り上げ検討しよう。第二号方形周溝墓は一六×一一mの規模をもつ方形周溝墓であり、頂部一一×五mの平坦面中央にまず二棺が並葬され、次に、その間に一棺、平坦面端に一棺と東西軸で四棺が並び、後、平坦面東端と西端にそれぞれ二棺ずつ、計四棺が南北軸で埋められている他、平坦面の周縁から墓丘斜面に壺棺が埋められているのである。木棺は成人を葬る規矩をもつだけに一对四組、計八棺の埋葬は注目すべき在り方と言ふべきであろう。この第二号方形周溝墓の造営は中央の一对の木棺の被葬者の死を契機になされたものであり、「戸主夫妻」の棺として墓として成立したものである。続く三次にわたる一对の追葬者はその類縁の者であることは言うまでもない所であろう。戸主の兄弟が妻と共葬される場合と戸主の子息―次代の戸主を継承しなかった子息が妻と共葬される場合、戸主四代が妻と共葬される場合が考えられるであろう。いずれであるにせよ、「妻」として戸主―夫と同居する女性を対象にした葬の姿がそこには垣間見られるのである。壺棺が小児葬の棺具であることを想起すると、こうした夫妻の棺の外側・周縁に分布することもまた注目されるのである。いずれにせよ、ここには戸主

の姉妹の葬棺はなく、明確に区別される存在として位置づけられていることが読みとれるのである。隣接する第九号方形周溝墓は一棺、やや平坦面の一方に片寄り葬られているが、この場合、空間の広い東側に「妻」が葬られ、二棺並葬となる姿が期されていたものと見てよいであろう。

こうした方形周溝墓の世界も、一つの変遷史をもつ。第一四号方形周溝墓はそうした展開の方向を示す重要な資料である。周溝墓平坦面中央に一棺が配置され、この被葬者が本方形周溝墓造営の機縁となったものであることを物語っている。そこには並葬される「妻」の姿はない。仮りに同軸の一棺が妻とするならば、その位置は第二・九号方形周溝墓のような中軸を分けて左右といった「強い絆の夫妻」関係を示すものではなく、むしろ遠慮がらに配置される「弱い絆でしかない夫妻」関係を示すものと言うべきであろう。両端の各一棺ももはや「夫妻」といった型をとらず、一棺ずつ別葬する戸主の子息というべき関係が読みとれ、彼らの姿は見られなくなるのである。勿論こうした在り方は、時間軸だけでなく階層軸にも共通することであり、卓越した家族の場合、単に戸主のみでなくその子息なども妻を同居させる型がとられ、一般的な家族の場合は単に戸主のみが妻と同居し、他の男性は妻と同居しえない型がとられるケースが多いであろうが、前者の場合は瓜生堂第二号方形周溝墓に近い型、後者の場合は第九号方形周溝墓に近い型の方形周溝墓が生まれることとなるであろう。

方形周溝墓は、河内に始まる倭国の墓制であり、倭国が各地に拡汎していく政治的な墓制でもある。弥生時代の成立は、中国・韓国で成立した「家」の概念を承けて、そうした「家」観が成立する時期でもある。土井ヶ浜遺跡に見た「戸主夫妻」の姿は、畿内では一層色濃く、方形周溝墓の中心を占めるものとして鮮やかに他の家族員と区別され

ている。戸主夫妻が家主・家母であるにとどまらず、政治的にも戸主の兄弟姉妹などに優越する面が与えられていたのである。初期、このように戸主と相並び戸主と共にある型で位置づけられた妻は、やがては墳墓から姿を消す時が来る。戸主一人を中心主体とする方形周溝墓の政治的拡汎が倭国の国策として実施されるからである。女性の地位が男性との上下で説かれねばならない時代がこの弥生時代にあるのである。

弥生文化を特色づける文物、例えば農業を例示してもこうした女性の在り方と密接に関連する。縄文時代の農耕とは全く異なる水稲農耕を基盤とする弥生時代の農業は、水田の造成、耕作その他、全て集落あげて、男性の主導する農業であり、他村との係り深い灌漑水利の維持も男性に委ねる所とせねばならぬものである。縄文時代の動物を追う男性、植物を栽培する女性といったイメージは一転し、農は男性を補助する形で女性が係り合うものとなったのである。女性が対構造で持ち得た農の世界が、男性が政治的に持ち維持する農の世界へと変化し、女性の依拠した「存在の原理」が根底から崩れ去るのである。新しく齊らされた工具や祭具、そうした用具の素材も加工度の高い石材、金属材に転じ、その製作も鍛造、鑄造技術を含めて男性世界に移り行くのであり、女性がそうした世界を担い得ないとされることもあって、男女の二分構造、二分意識が崩壊していくのである。今日に通ずる男女の性に基く差異は齊らされた新しい思惟―弥生時代の思惟によって誕生したものである。

三、古墳時代の「女性観」

弥生時代に成立した政治的世界―国家の展開は遂に「古墳」と呼ばれる巨大な墳墓の世界を発想し、その形態・祭式を各地に配布する動

きを生み出し、ここに古墳時代が成立する。倭国の大王を「古墳」前方後「古墳」に葬ると共に、各地の首長も大王に準じた「古墳」前方後「古墳」に葬らしめる動きが政策として執られているのである。

まず、こうした政策の根源にある天皇陵について考え、当時の「女性観」を窺うことにしよう。舞台を大阪府南河内に求め、その造営の意味を検討したい。大阪府南河内の藤井寺・羽曳野両市には数多くの天皇陵が見られる。一四代仲哀天皇に始まり一五代応神天皇、一九代允恭天皇、二一代雄略天皇、二二代清寧天皇、二四代仁賢天皇、二七代安閑天皇というように七天皇陵が集中しているのである。一六・一七・一八代の仁徳・覆中・反正天皇陵が大阪府堺市百舌鳥に営まれ、二〇代安康天皇は弑殺、二三、二五代顕宗、武烈天皇陵は大和、二六代継体天皇陵が摂津高槻市に営まれているのを除けば、殆んど天皇陵がこの藤井寺、羽曳野市に集まっていることになるのである。こうした現象が生じるその由縁を求めると興味ある事実に出合うのである。例えば、この地に最初に陵墓を造営したのは仲哀天皇であるが皇后は息長氏出身の神功皇后であり、続く応神天皇皇后も息長氏と係り合う品陀真若王の娘、仲姫皇后である。仁徳、覆中、反正といった堺市に出た天皇に続き、再び允恭天皇がこの地に陵墓を営むが皇后は息長氏に係り合う忍坂大中姫皇后であり、そのいずれもが息長氏に係る女性を皇后とする天皇である。恵我長野西陵、恵我藻伏岡陵、恵我長野北陵とよばれるこの三陵は共に古くは志紀郡に属する上、恵我の地名を冠するという特色をもっている。志紀郡恵我の地が息長氏の所領であったと考えられるのである。続く、雄略天皇は草香幡椽姫を皇后とし妃に葛城韓媛、吉備上道稚媛、春日和邇童女君を置くが、清寧天皇は皇后を置かず死去している。仁賢天皇は雄略天皇と春日和邇童女君の間に誕生した春日大娘を皇后としており、安閑天皇は、仁賢天皇と和邇

糠君娘の間に誕生した春日山田皇女を皇后としている。雄略・仁賢天皇陵は丹比高鷲原陵、殖生坂本陵とされ丹比郡に属しているが共に春日和邇童女君に係り合い和邇氏の一族と深い関係をもっている。清寧・安閑天皇陵は古市坂門原陵、古市高屋丘陵と呼ばれ共に古市郡に属している。春日山田皇后に語られるように和邇氏の一族に連なるものと見られるのである。

こうした天皇陵とその所在地の関係は「皇后」乃至は極めて近い「皇妃」を介してはじめてその関連が説きうることになるのである。言葉を変えれば、天皇はその陵墓を「皇后」由縁の地、所領の地に営むといった慣行のあることがここに明瞭となるのである。仲哀・応神・允恭三天皇は息長氏出自の皇后を通じて志紀郡に、雄略、仁賢天皇は春日和邇氏出自の皇后・皇妃を通じて丹比郡に、清寧・安閑天皇は共に古市郡に陵墓を築くが安閑天皇皇后が和邇氏出自の皇后であることを想えば清寧天皇にもこの和邇氏が何等かの係りをもっていたことが想像される。皇后と天皇陵の関係は、堺市に所在する仁徳・履仲・反正天皇にも該当するであろう。仁徳天皇は葛城襲津彦の娘磐之媛を皇后とし、履中天皇は葛城氏の一、葦田宿弥の女黒媛を最初妃とし、黒媛死去後、草香幡椽姫女を皇后としており、共に葛城氏の影が皇后なり妃の背景に見られるのである。三天皇の皇后、皇妃には葛城氏が強く関与し、その故にこそ、河内の志紀郡を離れ、和泉大鳥郡百舌鳥原に陵墓が営まれることになったものであろう。河内志紀・丹比・古市の諸陵墓と正に一致する在り方と言うべきであらう。

このように検討して来ると、天皇は何故に皇后を出した氏族の由縁の地―所領に陵墓を営むのかが問われるであらう。政治構造上、天皇はその極点に立つ存在であり、その権力の維持を確実な後継者には強く求めていたものと見るべきであり、そのために朝廷を支える諸氏族

から妃を求め、さらに天皇即位と共に皇后を定め、皇太子を定めるのである。皇后は政治構造上、女性世界の極点に位置づけられるものであり、天皇との間に最も密接な関係をもつだけに政治動向をも左右する存在であった。息長、和邇氏といった早くから天皇家の姻族であった氏に対し、葛城氏や蘇我氏がその抬頭とともに朝廷の姻族としての連繋を得んとして氏の子女を多く妃に送り、仁徳、履中天皇代、或いは敏達天皇代はじめてその氏から皇后を出すに至るのである。このように見るならば、氏を代表する女性の世界が、氏上たる男性と並び氏の命運を岐ける重要なポイントとされることが理解されるのである。皇后の果すべき任務は単に天皇にのみあるのではなく、氏に対しても強いものがあるというべきであろう。

天皇・皇后の場合、天皇のもつ領域に陵墓を築き皇后を共葬するといった型、天皇のもつ領域に皇后陵を営み別葬するといった型、或いは天皇のもつ領域に天皇陵を、皇后出自氏族の領域に皇后陵を営み別葬するといった型がありながら、そうした型を選ばず、皇后出自氏族の領域に天皇陵・皇后陵を営み別葬するといった、一般とは異なる一つのパターンを成立させているのである。このことは「天皇」の性格の一面を語るものであるが、他面「皇后」のもつ重要な一面を表現するものでもあり、政治構造の極点にたつものの論理が鮮やかに働いているのである。

ところで、天皇・皇后の語り際に際して欠くことの出来ないシーンが記紀に記されている。仲哀天皇・神功皇后・武内宿弥三者による熊襲・新羅征討の神意を問う場面がそれである。「古事記」では「天皇御琴を撫かして、武内宿禰大臣沙庭に居て神の命を請ひき。是に大后神をよせたまひて言教へ覚し詔りたまひ」と記されているが、こうした国策に対して神意を問う場合、琴ひく天皇、神の憑依する皇后、神言を

請い聴く武内宿禰大臣といった三者の機能的な分掌によって神意が顯然とするのである。こうした在り方は各地の首長の間にも見られた可能性がある。例えば群馬県前橋市発見の倚座彈琴男子埴輪像は上半身を欠くものの脚結などから見て極めて優れた地位にある男子像と考えられるが、膝の上に槽作りの琴を置き弾琴する様を表現する。実は琴の下、膝の間に雄渾な男性のシンボルを作り出しているのである。こうした男子像と対応する女子埴輪像としては大阪府豊中市野畑出土とされる極めて優れた地位にある女子像が挙げられる。身に「意須比」と呼ばれる祭衣を纏い、首に玉を重ね巻き、斜めに神繩しめ繩を袈けたその像容は、他に例のないすばらしいものである。ところでこの女子像の着用した意須比の下、表からは見えぬこの脚の付け根に、へうで刻まれた女性のシンボルが見られるのである。先の男子埴輪像と違い、この女子埴輪像といい、共に優れた政治的位置、宗教的位置を担う男女であり、琴、意須比上に纏がけし神繩に占められるその様は、まさに古事記の仲哀天皇・神功皇后のイメージに重なるものである。激しい琴の爪弾きと共に舞い神懸りして神意を口走る、やがては性交にまで至るエクスタシーが両者の間を走る、その間に神意は顯然と請け読みとられる。そうした動きがこうした二者の間に存したに違いないのである。天皇と皇后と大臣、そうした関係の中で「皇后」の果す重要性は、神の憑依、神言の発露といった重要な機能に負うのであるが、各地の首長の間にも同様な神意を問う祭儀が見られ、その「妻」がこうした機能を具えて存在したことを、二軀の埴輪像は雄弁に語りかけてくるのである。

地方の首長を中心とすえて、その政治構造に女性が如何なる機能を果たすかを検討する場合も、埴輪の世界は重要な資料を提示する。群馬県・保渡田八幡塚古墳は堂々たる前方後円墳であり、周囲に堀を繞し

堤を外周させる整美な古墳である。この外堤の一劃に多くの人物埴輪・動物埴輪を配置した一区が見られた。調査中、埴輪群が荒らされ詳細を窺いえなくなるといった不幸もあったが、私見による旧状の復原は以下のとおりである。

まず、中央やや奥よりに、椅座した室々たる容飾の男子像二軀、椅座した優雅なる容飾の女子像二軀が向い合って配置され、その脇に女子像一軀、杓入りの酒壺埴輪一点が置かれている。女子像は酒を容れた小壺を椅座する優雅な女人像に手渡し、椅座する二人の優雅な女人像は両手で小壺を向い合う椅座男子像に捧げ、椅座男子像はこれを納受する姿勢をとっている。まさに卓越した男女二組の酒宴・祭宴といった感のある空間である。この空間の背後には甲冑に身を固め正面を凝視する武人像の一群が六軀二列、一二軀整然と並び、さらにその背後には文人―官人群が六軀二列、一二軀が整然と並ぶ。武人群中にも、文人群中にも半身像、全身像表現の埴輪像があり、軍事機構、官僚機構に係る各階層の武人・文人（官僚）が集合する様を示している。祭宴する卓越した男、女二組の空間の前脇には飾馬三頭、裸馬三頭を牽いて六軀の馬飼人がたち並び、いま一方の脇には鶏三羽、水鳥六羽を配置し、人の姿こそないものの鳥飼人がこれを率いる様を暗示している。馬と鳥に囲まれた中、奥には手に鷹を留めた鷹飼人、腰に猪を下げた猪飼人がたち、その手前には駒索きを想わせる形で三頭の裸馬が置かれている。問題はこうした動物で囲まれた中で、盞を手に舞う女性像が三軀四列、計一二軀見られるのである。像は膳舞を演ずる女性、豊の明りの盞舞を舞う女性であり、内膳に係る女性の宴舞であろうと考えるのである。

保渡田八幡塚古墳のこうした埴輪群の性格は、単なる豊楽ではなく、首長の統括する機構の集る形、しかも各機構がその所掌する職種のシ

ンボル、特色も整えての集合という形だけに、より政治的な祭宴と見るべきであり、大嘗会にも通ずる一面がたどれるのである。首長を支える各機構がそれぞれを表現する姿態、執物、牽物、服飾を整えて集い、祭宴する首長の前面でその忠誠を誓うといった情景が最も相応しいのである。首長を支えるおびただし職業がある中で軍事、官僚機構、飼養機構、掌膳機構が選ばれて登場しているのである。他の古墳であれば、農人、工人、楽人などの職掌機構も見られるが、八幡塚古墳の場合は上記の機構を選び出し埴輪像として形象化しているのである。こうした各職掌機構が集う祭宴は、まさに王権継承の豊楽と忠誠の表現であるが、ここに登場する女性の姿は極めて限られていると言わねばならない。酒盞を承ける椅座男子埴輪像の卓越した姿は首長とそれを扶けるもの、天皇と皇太子に該当する男性であり、対面する捧酒の姿態をとる椅座女子埴輪像は首長の妻、扶けるものの妻―皇后と皇太子妃に相当する女性と見ることが出来るであろう。こうした酒盞を捧げる女性の在り方は記紀に多く見え、女性のもつ重要な職掌であったと言える。例え、対象の男性が夫であったとしても、そこには両手を整え指を揃えての捧げる姿態から見て「捧げる」といった上下の關係が明確に読みとれるのである。ところで、いま一種の女性像―盞を手に舞う掌膳の女性像は、それが群舞の形をとること、服飾から見ても特別に卓越を想わせる面がなく、日常、首長の妻に率いられて掌膳、掌縫といった職掌で奉仕する女性群であることを示している。日常は種々のこまめな仕事に従事するとしても、こうした重要な祭宴には、女性のシンボルとなっていた膳舞をもって奉仕しているのである。祭宴の場に臨む男性の集団が軍事機構、官僚機構、飼養機構の多くに岐れているのに対し、女性世界が僅か掌膳機構という一に限られている事実は重要であり、女性が朝廷なり、首長機構の中で果す機能は極め

て小さく、しかも捧酒、捧食、裁縫清掃といった特別な技能、組織を必要としない分野であることが注目されるのである。「職」を与えられぬ性、「技能」を与えられぬ性、「政治」に係わらぬ性として女性 が位置づけられているのである。

こうした女性の位置は、埴輪の造形からも説くことが出来る。人物埴輪像は、椅座像、全身像、半身像、跪坐像の四種に分けられるが、首長とその妻は全て椅座像で表現され、一部の弾琴像のみに椅座像が見られるに過ぎない。従って椅座像は高貴なるものの表現、神と共にある者の表現と見てよい像谷であるといえよう。ところで先述の文人・武人像を検討すると見事な裳、脚結をつけた文人群、挂甲に身を包んだ武人群は全て全身像の表現をとり、そうでない文人、武人群は全て半身像の表現をとっているのである。全身像に比し半身像が埴輪像の背丈としては一まわり小さい造形であることは言うまでもないところであり、全身像、半身像の表現は、実際の社会的、政治的な位置の下に係る差の表現と見てよいのである。半身像と称される像容の中もまた幾つかのタイプに分類できるが、男子像の場合、農夫像などには円筒に近い半身像まで見られるのである。換言すれば、埴輪像の中にも男子像は全身・半身像の各タイプに分化しており、職掌によってその像容表現が規定されているのである。ところでバラエティに富む中で規格の貫徹している男子像の世界に対し、女性像の世界はまた異なる趣きを示すのである。女子像の中で全身像で表現される埴輪像は二・三に過ぎず、それらは全て女性のシンボルを刻み作り出す特殊な女子像に限られている。対となる男子像があり、両者間での「性」を表現する必要からこうした像容が誕生するのであり特殊なケースと見るべきであろう。従って女子埴輪像には全身像の表現は見られないと言ふ興味ある視座が得られることになるのである。頸玉、手玉で身を飾り

太い帯を斜めに掛けた優れた位置にある女性像ですら半身像の表現で終始しているのである。単に祭服の故ではなく、女子像は半身像表現でよしとする想いが強く働いているのである。従って埴輪として樹立した時、背丈の高い貴人の男性に対し、背丈低く半身像で造形された貴女が、同様に背丈低く半身像で造形された低い位置の男性と同じ趣きを呈して並べられることとなるのである。造形世界から見ても、女性の世界が狭窄であり、全体が男性世界に比べて社会的にも、政治的にも低く位置づけられていることが如実に読みとれるのである。首長の妻―王妃の表現―椅座像と半身表現の女性の間には実に大きな深淵が横たわるものと考えられるのであるが、その深淵も実は男性たる首長―王あつての妻、名の通り「王妃」としての権勢であつたと見るべきであろう。

四、「女性論」の考古学・点描

考古学が明らかにする分野は非常に広汎である。慎重な移植ゴテの動きから遺跡や遺物が顕現し、多くの事実を語るのである。「女性論」を語るに当たっても、常に考古学の成果は参看されねばならないのである。文字すら持たぬ過去、文字の語りとほしい過去は言うまでもなく、文字多く語り豊かな時代にあつても、考古学は遺跡・遺物をもって多くの事実を語ることが出来るのである。本稿では縄文、弥生、古墳時代と歳月を追う中で、双分的対構造であつた男女間の性差が如何ように政治的に変化していくかを見、そうした変化の原型が大陸、半島を通じて齎らされた弥生時代の思惟にあること、そうした思惟の展開が極限に至る過程を古墳時代に見たのである。考古学はこうした大まかな「女性観」の推移を語るだけではない。歴史の一駒一駒に連なる日々

ることとしよう。

土井ヶ浜遺跡の墓地に帰り、北群の一面を見ると四一一、四〇九、四一七、四一〇号の四体の遺骨が重要な語りを含んで存在する。中央に葬られた四〇九号成人男性の両側に、四一一、四一七号成人女性の葬が見られるのである。三者の葬の位置から見て非常に深い類縁にあるものと言えるであろう。四一一号成人女性の埋葬後、四一〇号小児男性の死があり母なる四一一号女性の胸もとに葬られている情景が彷彿とする。注目されるのは男性の両側に葬られた二人の女性の関係である。先述したようにこうした並葬例は「妻」を表現したものと見られるから、中央の男性は生涯に前後して二人の妻を迎えたことになるであろう。先妻が死したのち、改めて妻を得、自からが死した際は先妻の傍らに葬られ、のち後妻が死したの傍らに葬られる、そういった経過がこの一群の人々から読みとれるのである。土井ヶ浜墓地では他にこうした適例を見ないが、二五〇号老年男性と二五一号老年女性を収めた組合式石棺の傍らに二四三号成人女性が葬られ、その間に二二九号小児女性の葬が見られるといった事例も同様な経緯がたどれると思われるのである。男性をめぐる再婚の事例がこのように存在する可能性が認められるのに対し、女性の再嫁を証する事例は全く認められないこともまた重要である。遺跡を熟視する中から種々の「女性観」を具体化する視座が拓けてくるのである。

古墳時代の女性について、埴輪世界はなお種々の語りをもつ。例えば栃木県鶏塚古墳では横穴式石室の前面のテラス脇から並ぶ埴輪像の発見があったが、そのうち三軀の人物埴輪の告げる所は大きい。裸体の男性全身像と裸体の女子全身像が向い合い、それぞれ腰をひねり、性のシンボルを鮮やかに誇示する姿態をとっているのである。その脇には、頭に水壺をのせ、背に子供を負う女子半身像が配置されている

のである。性の交りと、その象徴たる小児の表現を三人の男女で表現しているのである。こうした三人の像容は農夫・農婦と見るに相応しいものであるが、性の表現の必要から全身像で二軀が作られているのである。こうした三軀の人物埴輪の配置と相互の腰ひねる姿態からこれらが舞を演じるシーンであることが容易に窺えるのである。舞・田舞、田遊びの表現であろう。年頭、年穀の豊饒を願う年間の田仕事の全てを演じて豊稔に至る過程を演ずるのであるが、その最高の場面が稲の誕生を表現するための男女の性行為の所演であり、媾合による若子・稲穂（稲）誕生のシーンであったことは広く現存する祭式からも知られているところである。三軀の埴輪像の演ずる田舞・田遊びは古墳時代後期、すでに田舞・田遊びが成立し、実際に男女が裸体となつてこうした所作を演じる場のあったことを教えてくれるのである。当時の農村における現実社会の中で如何に女性が位置づけられて居ようとも、こうした祭儀の中にある男女、わけても女性の潑刺とした存在は注目せねばならないところであろう。埴輪は古墳祭式に組み込まれた人物の形象化であるから、当然古墳でもこうした田舞が演じられたに違いない。田人の忠誠のシンボルが田舞を演ずることにあつたのであり、政治的に首長に所有される芸能ではあつたが、なお在地で演じられると同様のエネルギーを貯えたその存在が注目されるのである。ただ、人物埴輪像の中には芸能に係ると思われる人物埴輪が多く見られる。鹿角をつけた帽を冠り跪く男子像、鳥を象つた帽を冠り餌をもつて鳥を招く男子像、楽器を叩きうつ男子像、そうした芸能の全分野が男子埴輪像で表現されているのである。こうした分野でも女性の姿は次第に失われ、僅かに田舞といった性に係る形、或いは膳舞といった性に与えられた形の芸能が女性に認められるに過ぎないのである。女性を語る一稿をここに終えたいと思う。

Archaeology of Female in ancient Japan

Masayoshi MIZUNO

Summary

Chronology of the female's social positions in ancient Japan is discussed archaeologically in this paper as follows:

1. In the Jomon period, the female exclusively used the right side in a dwelling, worshiped clay figurins as a god, and engaged in collecting activities, while the male used the left side in a dwelling, worshiped penis-shaped stones, and engaged in hunting activities. The female contrasted the male, then the sexual dichotomy was clearly established as mentioned above. But the specially large stone ones stood in the central plaza at many village suggests that the male would exceed in the leadership to the community.

2. In the Yayoi period, the position was fundamentally changed influenced by the Chinese culture. The archaeological features that the female would be generally buried beneath of the mound beside of a central person (male), a head of a family show a female social position became to be minor compared with male who took mainly charge of agricultural activities. A drastic diminution of female social role began in this period.

3. In the Kofun period, judging from the Haniwa or clay images found on burial mounds, roles of the service or religious sections in the political organization seemed to be exclusively assigned to the female, and then they were confined to the dependent class in the society.